

■雲仙市『ごみとわたしたちの暮らし』ワークブック完成



今月、雲仙市小学校社会科部会の先生方のご尽力で『「ごみとわたしたちの暮らし」ワークブック』が完成しました。これは、本学環境科学部と雲仙市・県環境部の三者協定「雲仙Eキャンレッジプログラム」の一環として、小学4年生の社会科で扱われるごみの問題を、身近な雲仙市の事例をとおして学習してもらおうと、ワークブックの作成をおこなったものです。

昨年夏から検討を開始し、「雲仙市のごみの分別について考えよう」「県央・県南クリーンセンターのしくみを知ろう」「私たちにできることを考えよう」など14のテーマで分担執筆してきました。大きな特徴として、「ごみをなくす10カ条の誓い方」の欄を設け、子どもたち自身がごみの分別や買い物時のエコバックの使用ができたかを記録し、みずからが学習したことを実践につなげ、その達成度を知ることができる工夫を図ったことです。ぜひ、まわりの大人の人も、子どもたちに負けず日頃の意識を高める好機となれば幸いです。

なれば幸いです。

19日には、中村修准教授と深見聡准教授が出席し、市長と教育長へワークブックの完成を報告しました。本ワークブック作成には、雲仙市立小浜小学校校長の安藤芳也先生をはじめ、雲仙市内の小学校の先生方に大きなご尽力をいただきました。これからも、環境科学部と雲仙市とが協働して「できること」に取り組んでいきたいという思いを確認する手渡し式となりました。

センターからのお知らせ

◎ボランティアを募集しています

環境教育研究マネジメントセンターは、学生や地域の方など読者のみなさんの力を必要としています。このニューズレターの作成補助や発送作業補助、学生みずからが企画しておこなう課外のフィールド活動などに興味のある方、まずはお気軽に深見までご連絡ください。

◎ニューズレターをお手軽に

定期購読しませんか？購読料無料、年間送料分の切手代(80円×4回)のみ負担。まずはセンターまで気軽にお問い合わせください。本紙は季刊号(年4回)発行しています。学内配布のほか、長崎県・雲仙市の主要公共施設にも設置。また、センターホームページからPDFファイルでダウンロードも可能です。

■出張報告—インドネシアで垣間みた環境問題

センター専任教員 深見聡(環境科学部准教授・観光地理学)

2009年度学部長裁量経費「インドネシアにおけるESDフィールド教育と大学間協力の可能性」(研究代表者:早瀬隆司センター長、分担者:菊池英弘環境科学部教授、渡辺学国際連携研究戦略本部教授、筆者)の一環として、長崎総合科学大学の石橋康弘教授・蒲原新一専任講師とともに、2月27日～3月4日の期間でジャカルタを訪問しました。



今回の訪問は、日本政府のODA事業の一環として2010年度から開始予定の「小学校における環境保全活動の実施による持続可能な発展のための地域ネットワークづくり」について、長崎大学ほかが日本側の実施機関、インドネシア大学、ナショナル大学ほかがインドネシア側実施機関と位置づけられている実施体制の内容について協議をおこなうのが大きな目的の1つです。これまで韓国・中国しか直接みたことがない筆者にとって、いろいろと考えさせられることも多い出張となりました。

たとえば、ジャカルタ市の中心部は上の2枚の写真のように高層建築物が次々に建てられています。一方、郊外に1時間ほど走ると、一面水田の農村風景が広がっています(右上写真)。しかし、このすぐ隣には、収集ごみの埋め立て処分場がありました。そこには貧困街の集落が自然発生的に成立していて、埋め立てたごみのなかから金属やプラスチックを拾い生活する、スカベンジャーとよばれる人びとが暮らしています(右下写真)。ニュースで知識として聞いていたことでも、実際にこのようすを見たときは衝撃を受けました。担い手は子どもたちのため、初等公教育も満足に受けられない実態がある





とのことです。平均月収が日本円で数万円のインドネシアは、富裕層と貧困層の生活格差は広がる一方で、途上国に訪れた急激な経済のグローバル化の光と影の一端に触れたような気がしました。スカベンジャー対象の学校が NGO により運営されており(左上写真)、公的な教育支援がなされていないなかにも、志あるインドネシアの教育実践者の姿に心打たれました。

滞在3日目は、ODA事業の実施校となる私立ペリタ小学校(全校児童約700名)を訪問(右上写真)。同校における環境教育を扱うカリキュラムは、社会科と理科のほか、各学年とも週1回の「環境教育およびジャカルタの文化」があります。これは、国の教育指針(日本の学習指導要領のイメージだが、詳細な言及まではなされていないので、良くも悪くも学校裁量権が大きいといえます)のうち、全国一律に定められている内容(スタンダード・コンピタンス)とは別に、ジャカルタ市が定める内容(ローカル・コンテンツ)の一環として展開されているものとのことでした。ごみの区別などを例として、「清潔な環境」をメインの切り口として、私たちはどのような行動を起こすべきかを教えています。

ここで、子どもや先生、まわりのコミュニティが一体となって EMS(環境マネジメントシステム)の確立にむけた取り組みをおこなっていくこととなりました。子どもたちの屈託のない笑顔がとても印象的でした。



私立ナショナル大学では、インドネシア側のカウンターパートとなるスカルトノ研究員の助力で、General Lectureの機会をいただきました(左写真)。90分の講義聴講のうち、5~6名の学生からつぎつぎと質問がなされ、環境問題に対する関心の高さをうかがい知ることができました。

わずかの期間でしたが、今回垣間見たインドネシアの姿は、経済成長の象徴的な高層ビル群や、バイクやバスが行き交う様子(インドネシアには地下鉄などの都市内を結ぶ鉄道がないため朝夕の渋滞や排気ガスの問題が深刻化しています)、市場やデパート(西武

や十河がありました)に象徴されるにぎわいの一方で、高級街と貧困街の格差、首都・大都市と地方のインフラ格差など、同時に解決するのは困難な環境問題が日々の人びとの生活のなかに顕著にみられるという、グローバル化のある意味で歪みともいえるもののように感じました。

筆者は観光研究を専門としているので、今度は、エコツーリズムや、地震など災害後の復興観光のあり方などに焦点をあてながら、次年度より始まる ODA による環境保全活動とのかかわりについて研究する機会があればと考えています。

■書架

『地域からのエコツーリズムー観光・交流による持続可能な地域づくり』

(敷田麻実編著、学芸出版社刊、2008年、¥2,100)

「エコツーリズムの最終的な目標は、単にエコツアーを実施するだけではなく、エコツーリズムの推進を通じて、地域自身が地域を主体的にマネジメントできるようにすること」。

編著者が冒頭で述べているこの一文は、エコツーリズムの本来持つ特徴をうまくとらえている。本書は、霧多布や黒松内、登別といった北海道での取り組みを紹介しながら、目標を達成するための視点が散りばめられている。編著者以外の執筆者のうち2名は、「NPO 法人ねおす」を運営し実務に携わっており、後半にある「協働によるプランニングの留意点」などは、成功例や理想論にとどまらず、失敗例にも言及しているので説得力がある。

欲をいえば、本書では地域を主体的にマネジメントする「エコ」の対象に、自然環境が主眼に置かれているが、「人間環境」もふくめた地域資源の活用こそがエコツーリズムの本質であることを前半の章でふれてもらえるとありがたい。

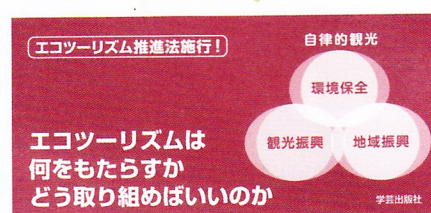
エコツーリズムの現場からみた利点と課題を集約したお薦めの一冊である。



地域からの エコツーリズム

観光・交流による持続可能な地域づくり

敷田麻実 編著
森重昌之・高木晴光・宮本英樹 著



■受託研究「きりしまの情報発信事業」実施



鹿児島県霧島市にある霧島商工会議所の地域資源∞全国展開プロジェクト「南の国から～きりしまの情報発信事業～」は、霧島市にある豊かな観光資源を、多様な観光目的に対応した形で集約した情報発信をおこなうことを目的としたものです。この具体的な取り組みへの評価および考察・提言をまとめる報告書の作成業務を受託し、2月に報告会をおこないました。

観光地「霧島」のイメージ定着を図り、鹿児島にきたら霧島市域に立ち寄りたくくなるような対話性のある情報発信の方法のあり方について、「長崎さるく」などの

事例を挙げながら、「地域住民」や「観光客」など誰をターゲットにしたものかを明確にする必要性をまとめました。

センターでは、このような受託研究、共同研究を実施しています。詳細はお気軽にお問い合わせください。

□■編集後記■□

第6号をお届けします。2月発行予定が諸般の事情で遅くなりましたこと、深くお詫びいたします。

昨年7月より改修工事のため仮移転中だった環境科学部は、4月より装い新たな校舎での業務を開始します。センターは、本館1階117号室にありますので、来学の際はお気軽にお立ち寄りください。／センター年報『地域環境研究』第2号も5月の刊行にむけて日々編集作業に追われています。／ニューズレター第7号は、6月25日付で発行予定です。

(深見)

環境教育研究マネジメントセンター News Letter (第6号)

2010年3月25日発行

長崎大学環境科学部環境教育研究マネジメントセンター

〒852-8521 長崎市文教町1-14

URL <http://www.env.nagasaki-u.ac.jp/>

Tel&Fax 095-819-2720(深見聡研究室)

E-mail fukami@nagasaki-u.ac.jp

(編集長：深見 聡)

印刷：株式会社 クイックプリント